

【総評】

進化し続ける日韓セミナー

朴恵仁（ティーチング・アシスタント）

戦後 70 年、日韓国交回復 50 周年という年に開かれた、記念すべき第 10 回日韓セミナーは T A の私にも非常に勉強になり、また感動したセミナーでした。私は大学 2 年生の頃、学生として日韓セミナーに参加したことがあります。その年と比べて大きく変わったと感じたことのひとつは、多くのグループのテーマが日韓問題を扱っていることです。人は難しい問題は避けて通りたいものだと言われますが、今回自ら歴史や領土問題などについて話し合いたいと言ってくる学生の姿を見て、驚きもあり誇らしさも感じました。また、私ももっと日韓問題について勉強しないといけないと思いました。今回、学生同士がすぐに仲良くなれたことや、特に、素晴らしい発表ができたことは、学生の皆が心を開いて話し合えた結果であるに違いないと思います。利益や損害のために動かざるを得ない国の代表や、政府の人のかわりに、利益などは考えない日韓の学生が集まり、ここまで真剣に話し合えたことは大きな意義を持つと思います。日本と韓国の上の世代はまだ互いに対して負のイメージを持っているかもしれません。しかし、今回のセミナーのように日韓の若者が声を発していくことが、その偏見をなくす第一歩となるとを固く信じます。そこから日韓は良き同盟国、良き友となっていくでしょう。

第 10 回日韓セミナーが今までと違ったもうひとつの点は、お互いの言語で発表をするということが目標に掲げられていたことです。そのため、セミナーが開かれる前の事前準備として、日本側は、授業中はもちろん、T A の私が講師を務めている昼休みの韓国語講座にも参加していました。今年は例年と比べ非常に高い参加率であったらしく、楽しくない授業にも頑張ってくれたことに感謝の意を表したいです。勉強を始めたばかりの韓国語で原稿を書き、発表できるまで多くの努力を尽くした結果、素晴らしい発表までたどり着いたと思います。また、韓国側はこの日韓セミナーは授業ではないのにもかかわらず、テレビ会議のときに高い参加率を見せてくれました。さらに、ほぼ全てのイベントが韓国側の学生の事前準備で行われたため、事前にたくさんのイベントを考えてくれた韓国側の学生たちにも感謝の意を表したいです。

大学院生になったばかりの私が、毎年の大きいイベントである日韓セミナーに T A として参加すると決まったときには不安もありました。しかし、授業が始まり日本と韓国の学生の皆の顔を見て話すことができて、不安より楽しみが膨らみました。実際、セミナーの最中も学生のように楽しんでいる私の姿を見かけることは難しくなかったと思います。それほど、第 10 回日韓セミナーは私にとって忘れられない思い出となりました。それは、毎日笑顔でセミナーを楽しんでくれた学生の皆のおかげです。そして、このセミナーに参加できる貴重な機会を与えてくださり、素晴らしいセミナーを作ってくださった森山先生と金先生に心から感謝します。来年以降の日韓セミナーも、今回のセミナーのように日本と韓国の学生が協力し合うことにより素晴らしいものになることを心より祈念いたします。

第 10 回を迎えた「韓日大学生国際交流セミナー」を ふりかえって

金榮敏（同徳女子大学校）

韓国のことわざに「10 年経てば山河も変わる」というのがあります。日本の「10 年一昔」ということわざとほぼ同じ意味ですが、10 年という年月がそれだけ長い時間であるということでしょう。「韓日大学生国際交流セミナー」も、2004 年第 1 回が行われてから、今年で第 10 回目を迎えました。それなりの伝統を築き始めたと言えるのではないかと思います。今年の第 10 回のセミナーは、まさにその伝統が現れたセミナーであったと評価できます。「戦後 70 周年、日韓国交回復 50 周年：韓日大学生の対話」というテーマで、あえて両国の関係の現状を露呈するような問題を取り上げ、自国優先主義、ナショナルリズムを乗り越えた若者同士の対話を試み、どの専門家・政治家でもできないであろう、立派な共同談話・共同意見を発表した今回のセミナーは本当にすばらしいものでした。これだけのセミナーに築き上げた両校の学生の皆さんに心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。

今回のセミナーの成功には、学生皆さんの努力、担当教員・関係者全員の全面的な支援、それに何より、今年が終戦 70 周年（韓国では光復 70 周年）・韓日国交正常化 50 周年を迎える、韓日両国にとっては大変意義深い年であるという認識が大きく働いたと思います。それに加えて、10 回に至るまでの間、セミナー運営において、毎回少しずつ改善してきた点が積み重なり、プラスの影響を及ぼしたことも大きかったでしょう。そこで、第 10 回目を迎えた現時点で、「韓日大学生国際交流セミナー」の歴史を振り返ってみたいと思います。下の表は、第 1 回から第 10 回に至るまでの「韓日大学生国際交流セミナー」の概要をまとめたものです。

＜韓日大学生国際交流セミナーの概要＞

回	期間／場所	参加人数	主な活動	特 徴
第 1 回	2004 年 8 月 24 日～ 29 日、同徳女子大	お茶大：12 名、 同徳女子大：17 名	日韓言語・文化エクステン ジブプログラム	ホームステイ実施、文化探訪 実施
第 2 回	2005 年 6 月 27 日～ 7 月 6 日、 お茶の水女子大	お茶大：40 名、 同徳女子大：12 名	研究発表（食、大学生生活、女 性）、野外活動、グループ活 動報告会	シンポジウム実施、文化探訪
第 3 回	2006 年 8 月 22 日～ 28 日、同徳女子大	お茶大：18 名、 同徳女子大：31 名	研究発表（子供、食、結婚、 美意識、ミュージカル、江 戸・朝鮮時代の女性）、野外 実習、野外実習報告会、	ホームステイ、文化探訪
第 4 回	2007 年 8 月 2 日～ 10 日、 お茶の水女子大	お茶大：23 名、 同徳女子大：14 名	全体テーマ：「グローバル時 代における日韓の重要性」、 研究発表会（若者、結婚、舞 踊・音楽、笑い）、野外実習	日韓民族衣装体験・日本文化 体験、文化探訪、研究発表を 野外実習報告と合わせて実 施、学生主導のセミナー運営 の試み

第5回	2008年8月5日～12日、 同徳女子大	お茶大：20名、 同徳女子大：35名	全体テーマ：「日韓の真の対話と交流を求めて」、実習報告を中心とする体験討論型発表会（若者のファッション、伝統建物、英語教育、食文化、韓国の軍隊、美容文化・意識）、野外実習、合宿（1泊2日）	日韓民族衣装体験・韓国文化体験、文化探訪、メールやインターネットの掲示板などによる事前交流の本格的な導入、研究報告書のグループ別共同作成、合宿実施、学生主導のセミナー運営
第6回	2009年8月3日～11日、 お茶の水女子大	お茶大：20名、 同徳女子大：14名	全体テーマ：「グローバル時代に世界のため、日韓が共同でできること」、体験討論型発表会（環境、文化、女性、児童）、野外実習、合宿（2泊3日）	日韓民族衣装体験・日本文化体験、文化探訪、映像チャット・文字チャットなどによる事前交流の活性化、研究報告書のグループ別共同作成、合宿の拡大実施、学生主導のセミナー運営
第7回	2010年8月17日～24日、 同徳女子大	お茶大：25名、 同徳女子大：24名	全体テーマ：「日韓の過去・現在を見つめ未来を考える」、体験討論型発表会（若者文化、女性の社会進出、都市・IT、歴史・平和、教育）、野外実習、合宿（3泊4日）	日韓民族衣装体験・韓国文化体験、文化探訪、事前交流実施、研究報告書のグループ別共同作成、合宿の拡大実施、学生主導のセミナー運営、料理体験
第8回	2012年7月24日～31日、 同徳女子大	お茶大：24名、 同徳女子大：30名	全体テーマ：「東アジアの平和のために日韓の若者は何ができるか」、体験討論型発表会（歴史教育、日韓の女性意識、従軍慰安婦問題、韓国の中の日本・日本の中の韓国）、野外実習、合宿（3泊4日）	日韓の歴史問題などのテーマの取り入れ、日韓民族衣装体験・韓国文化体験、文化探訪、TV会議システムとFacebook・スカイプの導入による事前遠隔交流の活性化、研究報告書のグループ別共同作成、個人レポート作成、合宿実施、料理体験
第9回	2013年7月25日～8月3日、 お茶の水女子大	お茶大：21名、 同徳女子大：24名	全体テーマ：「東アジアの共生のために日韓の若者ができること」、体験討論型発表会（報道、共生、歴史、教育、文化）、野外実習、合宿（全期間）	セミナー全期間2カ所で合宿実施、日韓民族衣装体験・韓国文化体験、文化探訪、TV会議システムなどによる事前遠隔交流の実施、研究報告書のグループ別共同作成、個人レポート作成、同徳女子大生にも「多文化交流実習Ⅱ」の単位（2単位）付与
第10回	2015年8月2日～10日、 同徳女子大	お茶大：27名、 同徳女子大：24名	全体テーマ：「戦後70周年、日韓国交回復50周年：韓日大学生の対話」、1次研究発表会・対話討論型最終発表会（女性の社会進出、歴史問題、反日・嫌韓感情、民間交流、共同声明）、合宿（全期間）	セミナー全期間2カ所で合宿実施、日韓民族衣装体験、文化探訪、TV会議システムなどによる事前遠隔交流の実施、研究報告書のグループ別共同作成、個人レポート作成

変化を中心に見てみると、まず、主な活動においては、第3回までは日韓言語・文化エクステンジプログラム(第1回)と研究発表(第2、3回)を中心に行っていましたが、第4回からは野外実習の強化や野外実習報告と総合した形での研究発表(第4回)や体験討論型(第5回から)の研究発表へと転換しました。その結果、事前に調査した結果をただ発表するだけではなく、共同体験、共同作業、積極的な意見交換・議論が活発に行われるようになりました。また、第5回からはプログラムの一部として合宿を取り入れ、寝食を共にし、より密接な交流が可能な環境を設けました。さらに第9回からは、合宿をセミナー全期間に拡大し、交流の機会を増やすとともに、異文化に対する新しい気づきが自然にできるようにしました。

その他の主な変化としては、まず、第4回から日韓民族衣装体験、日韓文化系のサークルの友情出演などの日韓文化体験プログラムを設けたことが挙げられます。初対面のコミュニケーションを円滑にするためのアイスブレイクをかねての企画だったのですが、学生からの評判が高く、以降セミナー初日の固定企画になりました。また、第4回からセミナー運営の一部を学生に任せ、徐々にその範囲を広げてきました。より自主的なセミナー参加と自分たちの手でこのセミナーを作り上げるのだという自覚と責任感を持たせるためでしたが、回を重ねるにつれて、セミナー運営に対する学生の姿勢もより積極的になってきました。第5回からはメール・インターネット掲示板などを活用した事前遠隔交流を導入しました。セミナーの約3ヶ月前から始め、自己紹介からグループ別テーマの選択、事前調査の範囲・野外実習先の選定などに至るまで、多様な事項に関する意見交換・議論を行いました。第6、7回では映像チャット・文字チャットを用い、さらに第8回からは同徳女子大学のTV会議システムの導入により、TV会議・Facebook などを通したより円滑な遠隔交流が可能になりました。事前遠隔交流は事前調査をより充実することに役立つのみではなく、同じグループ内の学生同士がより親しくなる契機にもなり、交流セミナーのスムーズな開始にとっても重要な役割を果たしてきたと思います。その他に、料理体験の時間を設けるなど斬新な企画もありました。

研究発表や報告書の作成においても、両校のグループごとに別々行っていたのを、第5回から両校のグループが共同で研究発表をし、報告書を作成するようにし、グループ内でより活発に議論し、できるかぎりお互いの主張や意見をひとつの枠内にまとめるようにしました。また、第8回からは個人レポートを出すようにし、セミナーを通じて得られた新しい気づきや学びを自ら確かめる機会を与えました。

最後に、以前に比べて、今回のセミナーで特に評価できることを3点ほど付け加えたいと思います。まず、一つ目は、2回にわたって研究発表をしたことです。2回発表することによって、1回目の発表で相手の意見・立場を確かめ、それをもとに深い議論をし、2回目の共同発表へと繋げていけることができたと思います。二つ目は、お茶大の学生が韓国語で1次発表を行ったことです。韓国語を習い始めたばかりなのに、一生懸命韓国語で発表することによって、外国語でコミュニケーションすることの難しさを体験するとともに、異文化交流において言語そのものがそれほど大きな壁ではないということも実感したのではないかと思います。三つ目は、学生主導のセミナー運営が定着したことです。今回はセミナー運営の多くを学生に任せましたが、歓迎会から送別会に至るまでのすべてのプログラムにおいて、学生の主導的で熱情的な姿勢が光りました。韓日の学生の共同司会、クイズゲーム・団体ゲームの導入など斬新なアイディアもとてもよかったです。

以上、簡単ではありますが、今までの「韓日大学生国際交流セミナー」の歴史を振り返ってみました。回を重ねるにしたがって、「韓日大学生国際交流セミナー」がだんだん発展してきたことがわかるかと思います。今までこのセミナーに参加した総 455 名の学生と関係者みなさんの努力があってこそ可能なことであったと思います。これからも、草の根交

流の場として、この「韓日大学生国際交流セミナー」が続いていくことを心から願います。
さらに、このセミナーに参加した皆さんがセミナーを通じて得た貴重な体験を忘れず、それぞれの草の根交流の場において生かしていくことを期待します。

戦後 70 年の日韓学生のも敢なる挑戦

森山新（お茶の水女子大学）

2004 年に第 1 回が開催されて以来、今年で第 10 回を数える今回のセミナーは、戦後 70 年、日韓国交回復 50 周年という歴史的に重要な年に開催された。かつ、時の日韓両政権はナショナリズム重視、国益優先の限界を越えることができず、対立の構造を打開できずにいる。そのような中、真理を追究し正義感に溢れる学生と教員とが、その壁を乗り越えようとの思いから、今回のセミナーは「戦後 70 周年、日韓国交回復 50 周年：日韓学生の対話」をテーマに行われた。

今回はどのグループのテーマも各自がナショナリズムを越えることなしには到底合意に至ることができないテーマを掲げ、お互いに友情を深め相手の言葉を学びながら、相手の意見に耳を傾け、お互いが納得できるような Win & Win の回答を求めて共同発表、共同声明を行った。学生たちは限られた時間の中で言葉と文化、受けてきた教育などの壁を乗り越えながら、見事な最終発表をしてくれた。またこれまでの日韓セミナーは、韓国側の日本語力に甘え、すべての行事が日本語により行われてきた。しかしそれは、国を越えたインターナショナルなアイデンティティの構築とインターカルチュラルなシティズンシップ教育にとって、解決すべき重要な課題の一つであった。今回は訪韓までの期間に学生たちに韓国語の学習を課し、第一次発表を韓国語で行ってもらうという「難題」を日本側学生につきつけた。学生たちは必死に韓国語を学び、第一次発表でも悪戦苦闘して自身の発表を行っていた。しかしそれが日本語ですべてを行わなければならない韓国側学生の立場を理解し、両国の学生の親密な関係の促進につながった。

第一の社会進出のグループは、日韓共に大きな課題である女性の社会進出をテーマにその解決策を模索した。互いに相手を批判するのではなく、お互いの成功に学びながら、日韓両国が共通の課題に取り組むことは、両国それぞれの課題である女性の社会進出解決のみならず、両国が強いパートナーシップに結ばれて共に歩んでいく上で重要であり、そこにおいて両国を代表する女子大である同徳女子大とお茶大の学生が先頭に立つことの意義は大である。

第二の歴史問題のグループは、日韓の対立の根本である歴史問題、中でも解決が極めて困難な領土問題と戦後未解決の課題として浮上した慰安婦問題とを取り上げた。とりわけ領土問題は両国学生が義務教育という国民教育の中で、当たり前のもので学んできた内容であり、たえず対立の火種となってきた。これこそ学生一人ひとりが自身の中に育てられたナショナリズムを見つめ直し、それを克服していかなければ、そもそも解決の糸口すら見出すことは不可能である。セミナー中に訪問した軍事境界線は、人が足を踏み入れることができない環境となる一方で、地上の楽園として、動植物たちが国境を気にせず自由に行き来している。そのような地球に、いつしかナショナリズムが台頭、国境線を引き国土を定め、国民教育を施す中で、我々人間はいつしか心の中に国境線を引いてしまった。今回のセミナーでは学生たちが友情を基盤とし、自身が受けてきた教育を見つめ直しながら、領土問題の解決を話し合った。慰安婦問題は単に国家間の問題としてではなく、女性の人権問題としても扱われるべき問題であり、その意味で両国の女子大生が討論することの価値は大である。これまでのセミナーでは、お互いの認識の違いに対する気づきには至ったものの、それを越えて共同の声明を行うという点では少なからず課題が残っていた。しかし今回のセミナーではそれを越えた最終発表であったと言えるだろう。

第三の反日・嫌韓をテーマにしたグループでは、まさにセミナーでの経験を基盤に、何故韓国の人々が反日なのか、日本に何を願っているのか、何故日本の人々の一部は韓国が嫌いなのか、どうすれば好きになれるのか、といった問題についてその原因を真剣に考え合い、解決策を提案した。参加者たちは自ら自身が、または親をはじめとした周囲の人たちが、嫌韓であったり反日であったり、またはさまざまなステレオタイプや誤解を抱きながら生きてきたりしていることに気づき、互いにそれを告白し、このセミナーを通じてそういった気持ちが大きく変わっていった経験の中で、このような対話と交流こそが、反日・嫌韓を越える道であると確信をしていた。

第四のこれからの日韓交流のあり方を考えるグループでは、これまで行われてきた両国の交流が何故日韓関係を改善する力となり得なかったのかについて考え、また第三グループ同様に、今回の交流セミナーで、互いの国に対する自身の意識が変わっていった経験をもとに、これから何をすればよいのかについて、研究と実体験の両面から説得力のある提案を行った。

第五の戦後 70 年の日韓学生共同声明では、冒頭で、安倍首相が戦後 70 年首相談話に謝罪の気持ちが盛り込まれないという当日朝の報道が紹介され、それに代わるものとして共同声明が行われた。共同声明ではまず戦後のこれまでの日韓関係を振り返り、その上で日韓の学生が日本語と韓国語で同一の声明を発表した。その内容を聞きながら、時の両政権が何と愚かで心の狭い争いをしているのか、何故にこの学生たちのような声明ができないのかといった気持ちにならざるを得なかった。人間はだれしも過ちを犯すことがある。それを隠蔽するのではなく、真摯に見つめ、誠意をもって対応していくことこそが信頼回復には近道であること、また日本は確かに何度も「謝罪」を口にしてきたが、残念ながら日本から幾多の傷を被ってきた、韓国をはじめとした周辺の被害国はそこに真摯と誠意を感じることができなかったということを、対話を通じ日本の学生は強く実感していた。同時に韓国の学生たちも、日本の政治家とは明らかに異なる日本の学生の本当を目にしながら、過去を許し、ともにいつまでも歩んで生きたい大切な隣人（パートナー）として、日本の学生を素直に熱く包容（抱擁）していた。

今回、セミナーの全期間、寮を提供していただくことで、日韓の学生が寝食をともにし、対話と協働の場を確保することができた。本セミナーは過去と国境の壁を越えられずにいる日韓両国の学生が、日韓と東アジアの共生を実現するための道を模索することを目指している。そのために前々回からTV会議システムを導入し、毎週のように遠隔の事前交流を続けてきた。今回はそれに加え、セミナーの全期間、日韓の学生が寮や合宿で寝食をともにすることで、共生のための対話と協働の場を確保したことは、難しい課題にもかかわらず対話を深めることを可能にしたと思う。また今回は同じく日本の植民地として苦難を負ってきた台湾からも 1 名の学生が参加したことで、単に二国間ではなく東アジア全体につながる可能性を持つことができた。

さらにセミナー運営の多くが学生にゆだねられたことである。それにより、学生の姿勢が受身にならず、自らが築き上げるという意識を高めた。とりわけ最終日の送別会の盛り上がりは、準備からセミナー期間中の企画のすべてを学生たちが作り上げてきたという達成感と自信に満ちており、これまでのいづれにも増して、学生たちの感動と涙を誘った。

最終日、ひそかに準備した感謝の手紙を韓国側の学生に手渡すと、韓国側の学生は涙で喜びと別れの悲しみを表現、それに日本側のメンバーももらい泣きし、互いに抱き合う場面が至るところで見られた。学生にゆだねることはある意味不安もあり、失敗も覚悟しなければならないが、最終日のその光景は、学生に運営を委ねてよかったとの思いを我々教員に抱かせてくれた。また学生たちが国を越えて一つのゴールを目指して協働する経験は、今後グローバル時代を生きる彼女たちに大きな経験となるであろうし、国や政治が越えら

れずにいる国境の壁を私たちは越えることができるということを確信できたに違いない。

もちろん1学期間の遠隔交流と、1週間の合宿でできることは限られている。しかし今回の経験は、これからグローバルな心を持ちながら、日韓を、東アジアを、そして世界をまとめる力と自信を、彼女たちにあたえてくれたと信じている。これからもフェイスブックや交換留学という形に変えて、継続、発展していくことを願ってやまない。

最後に、ここまで今回のセミナーを成功に導いてくださった同徳女子大学校の金榮敏先生、日本語科の諸先生方に心から感謝を表したい。また学生寮をはじめ様々な便宜を図ってくださった金樂薫総長にも感謝したい。次回の日本でのセミナーでそのご恩返しができればと思ってやまない。



送別会（8月8日、同徳女子大学校）